南葵音楽文庫ミニレクチャー　vol.15 記録

学習院時代の友人たち

泉　健（和歌山大学名誉教授）

2018 年 3 月 24 日 （土） 11:00

南葵音楽文庫閲覧室（和歌山県立図書館内）

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500

今回は徳川頼貞が学習院に在籍していた頃、どんな友人がいて、彼らとどのような音楽活動を行っていたのかを振り返ってみたいと思います。そのことを知るための手がかりが二つあります。一つは辻邦生の『樹の声　海の声』という作品。今一つは音楽奨励会というコンサートのシリーズです。

『樹の声　海の声』は、図示百合子という実在の人物の半生の記です。百合子の兄尚武は学習院に通い、徳川頼貞と同じ年で、２人は友人でした。その関係からこの作品の中には、南葵音楽文庫や南葵楽堂、また当時来日した西欧の演奏家のことなどがあちこちに出てきます。また二人よりも 9 歳年上の田村寛貞もしばしば登場します。彼はハンスリック,E.の『音楽美論』を訳すなどして、日本の音楽学の草創期に大きな役割を果たした人物でした。

音楽奨励会は 1910 年（明治 43）に結成されました。学習院にオルフォイス音楽会という西洋音楽愛好家のグループがあり、その中心になっていた田村寛貞、二条厚基などが発起人となって結成されたものです。その趣旨は、西洋音楽のコンサートをしばしば行い、西洋音楽の演奏家たちを援助し、西洋音楽の受容を積極的に進めていこうというものでした。

演奏会は、当初鹿鳴館を改修した華族会館で行われていましたが、後に東京音楽学校の奏楽堂や、東京大学の基督教青年会館なども使用されるようになりました。演奏会のプログラムや批評を読んでみると、当時の人々が、一生懸命西洋音楽を学ぼうとしていた熱意がひしひしと伝わってきます。明治の末から昭和の初めにかけて、この音楽奨励会は、日本における西洋音楽の受容に大きな役割を果たしてきたことがわかります。

鹿鳴館→後に華族会館として使用

学習院初代校舎